

こんにゃくの生子（吸枝）発生部位について

1 試験のねらい

生子（吸枝）の発生生態及び発生部位を明らかにし、生子の増収を図る栽培法確立の参考資料とする。

2 試験方法

本場畑圃場において二年生を用いて行った。植付時期は5月14日である。施肥量はアール当たり窒素1.5kg、リン酸1.25kg、カリ1.5kgで植付時に1/3、培土時に2/3施用した。調査は7月3日から10月12日まで10日おきに掘り取り、地上部、地下部の各形質について行った。なお、その他の管理については慣行に準じた。

3 試験結果及び考察

地上部の各形質は7月25日まで増加したが、その後の変化はほとんど認められなかった。ただ地上部重は8月22日以降漸減した。地下部は新球茎が7月3日には既に肥大を始めており、その後、徐々に増加した。9月4日以降の増加は確認できなかったが、作況調査等から推定するとそれ以降も増加を続けるものと考えられる。吸枝も7月3日には発生しており、地上部の生育が一定になった10日後の8月3日には吸枝数の増加が止まった。その後、先端の肥大が始まり、1ヶ月後の9月4日には大部分の吸枝の先端が肥大した。また同時に吸枝の伸長と吸枝重の増加が停止した（図-1）。

このことから、こんにゃくの地上部形質は7月下旬に増加を停止し、吸枝数は8月上旬に決定し、9月上旬には先端肥大吸枝数が決定し、吸枝の伸長及び吸枝重の増加が停止すると考えられる。

吸枝は2/5の葉序で分布する苞及び葉柄痕1に対して1の割合の吸枝群から発生していた。吸枝群は1株平均10.5群認められ、1株当たりの吸枝発生数は15.7本であった。また、上部から第6番目の吸枝群からの発生数が最も多く3.5本であった。最長吸枝のある位置は、吸枝の発生数の多い吸枝群の位置と一致する傾向が認められた（図-2）。

このことから、新球茎の中央部は吸枝の発生及び伸長について、最も活性の高い部位であると推定される。

4 成果の要約

地上部形質の増加は7月下旬に停止し、吸枝数は8月上旬に決定し、9月上旬には先端肥大吸枝数が決定する。このころ、吸枝の伸長及び吸枝重の増加が停止すると考えられる。

吸枝は葉柄痕1に対して1の割合に分布する吸枝群から発生しており、中央部の吸枝群から発生している吸枝は数も多く、伸長も盛んであった。

（担当者 作物部 倉井耕一、米内貞夫）

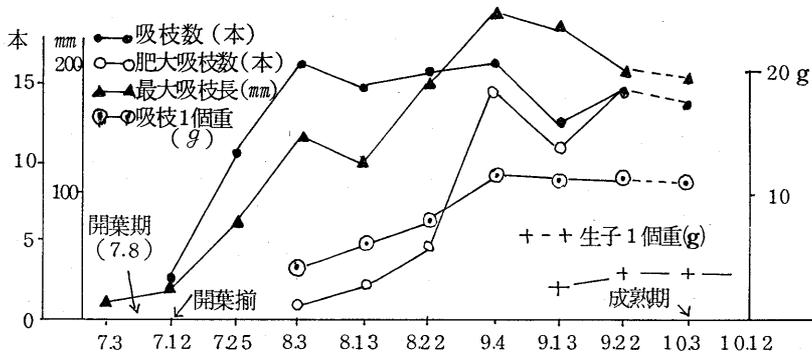
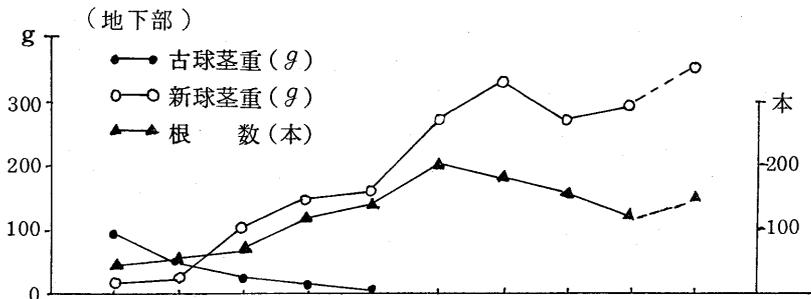
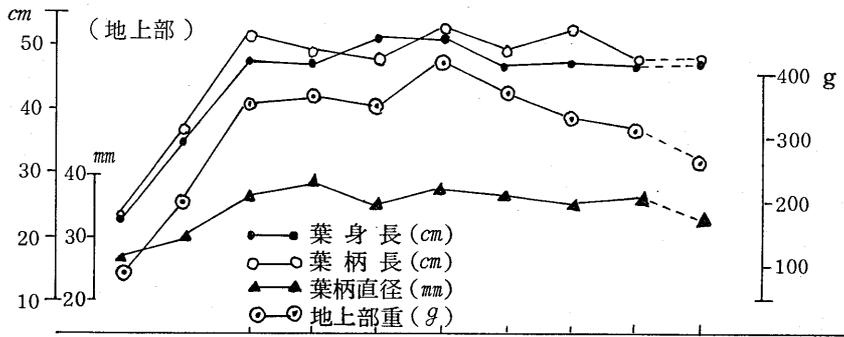


図-1 各形質の10日毎の推移

注 10月3日は立っているものについてのみ調査をした。

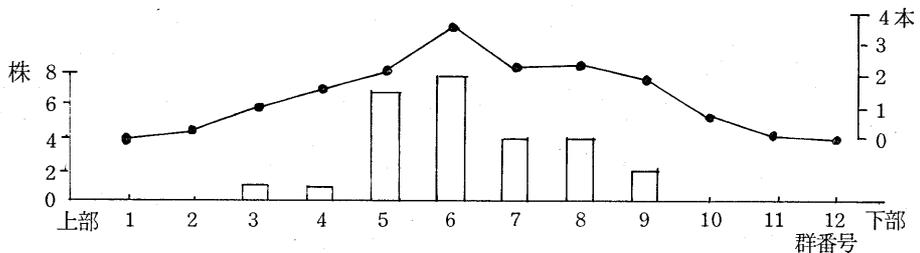


図-2 各吸枝群における最長吸枝の分布と1株当たりの吸枝数の分布